

---

# 忘れモノ屋

棗 祥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

忘れモノ屋

### 【Zマーク】

Z9914C

### 【作者名】

棗 祥

### 【あらすじ】

何かお忘れモノはございませんか？ありましたら一緒に探しましょ。意外な所に…ほら。隠れているかもしませんから…ね？

## ○・忘れモノ屋 開店（前書き）

この小説はファンタジーっぽいですが、少し現実味のある文なので、  
どうぞお立ち寄り下さいね…。

## ○：忘れモノ屋 開店

それは、本当に探している時にだけ表れる。  
突如として表れる。  
用がなくなれば姿を消す。  
そのためは、

### 《忘れモノ屋》

やつ。例えば、無くなつたモノをそのお店に行つて取り戻せたり  
するわけです。

便利ですよね。

でも、ただそれだけじゃない。  
それが《忘れモノ屋》。

「こいつしゃべってませんか。何をお探しですか？」

○・忘れモノ屋 開店（後書き）

これからじぶん書いていきます！

# 1・1・香菜子

朝。今日も朝が来た。何で朝なんか来るの~いやだ…。学校なんか行きたくないよ…。

「香菜子…早く起きあて学校に行かなさいー!聞いてるのー~。香菜子!」

「ウルサ~…~

「わかつてるよ~」

ふてくされながら、起きて学校に行く支度をする。行きたくないの!」

「行つてきまや…」

寒い…

どうせん冷えこんでくなあ…。

う…~!

「おはよ~」

「美佳~ビックリしたあ…。おはよ。」

「どうしたの?元気ないじやん?」

「うと…。まあね。何か学校行くの面倒で…。つまんないつて言つ

かせ…。」

「あ~。わかるわかる~。でもさーうしがこるじやん~。頑張つて!」

「うそ…」

私は美佳の言葉に支えられてなんとか学校に行つた。

「…？あれ？」

教科書が…ない？

ロッカーにしまったっけ？

…  
ない…

どこに行つた??

とつあえず、ないから借りに行かないと。

その時間は他のクラスに教科書を借りた。

「あれ？？」

今度は消しゴム？！

少し小さめで丸いから転がったのかな？

…  
ない…

何でないの～？！

そんなことが、ずっと続くのでした。

そして…

途方にくれていた時、ふと顔を上げるとそこには…

なぜか、商店街の一角に古い小さな小屋みたいなものが建つていました…

ここは確かに、空き地だったのに…

最近建つたのかな…でも、そしたら綺麗なはず…お世辞にも綺麗とは言えないし。

よく見ると屋根のすぐ下の所に看板がある。なんて書いてあるんだ?

《忘れモノ屋》

どういった意味だる…

何か興味深いな

入ってみよ！

そして香菜子はその小屋のようなお店に引き込まれるかのように入つていったのでした。

## 1・2・お店の中

中は見た目よりも物凄く広かつた。しかし人気の無さに少し恐怖を感じた。

あたりを見渡すと、変な読めない文字で書かれた本や、小さいモノから大きいモノまで色々な色の玉らしきものが棚から溢れかえっていた。

お店…だよね？

そういえば、入ったのはいいけど、もしかしたらタダの民家かもしれない！

やばいな…。帰るか…。

すると、突然奥の暗がりでよく見えない所から、

カタツ

だ、誰かいる？

カツ カツ カツ カツ カツ

くる音がする…

怖い… 誰なの？人？

するといきなり、

「ワン！！！」

「わあ…………！」

。つて犬かい！！！

綺麗な真っ白なゴールデンレトリバー…可愛い…。あれ…？この犬

片目が…ガラスで出来てる…？？

「綺<sup>キナコ</sup> 柳湖？どうしましたか？」

高めのテノールの声が小屋中に響いた。人がいたらしい。階段からゆっくり降りてくる。

「あ、あの。すいません。お邪魔します。」

彼は、綺麗だった。すべてが、言葉には出来ないほどのかわいらを感じた。

そして…何か物悲しくほつそりと微笑む人だった。

「いえいえ。お客様でしたか。…いらっしゃいませ。何をお探しに？」

「あ…、いえ特に何もないんです。ただ珍しくてつい…。」

「そうでしたか。しかしおかしいですね。このお店はお客様以外には姿が見えないはずなのですが…。変ですね?」

「…。そんな仕組みどうやつたら出来るんですか?」

「企業秘密です。」

彼はにっこりと答えた。

あやしい…。

「あの…すいません。そろそろ帰ります。お邪魔しました。」

「おや。帰られるのですか?…。そうです。最近あなたの身の回りで無くなつたものは?」ぞこませんか?」

「え…。どうしてそれを?」

「お預かり…してますよ。」

「え?」

# 1・3・水晶玉

「そうは言つても映像だけですが。」

「どうゆうことなんですか?」

すると彼は、水晶玉がぎつしりつまつた棚の角から小さな水晶玉を取り出し、私の前に差し出した。

「…これが何なんですか?」

「覗いてみて下さればわかりますよ。」

彼はほつそり微笑んだ。私は不審な目でとりあえず言われた通りに覗いてみることにした。綺麗…だけど少し濁った色…紫に茶色つて感じかしら…。?! いきなり違う色に変わつて…これは…。私?それと…美佳だ…。今日の朝のホームルーム終わった休み時間の時の映像だ…。

「美佳~。トイレ行~!」

「一人で行きなよ~。今忙しいの~!」

「ケチ~」

そう。それで私、一人でトイレに行つたんだよね…。

「てかわ…。香菜子ウザい。いつもうちにばっかり頼つてくれるしさあ…。いい加減ウザいんだよね…。」

「やめなよ~美佳~。戻つて来ちゃうよ。でも、さつきの振りかたウケる。どこが忙しいんだよ美佳~!」

「だつてめんどうじやん!~トイレぐらい一人で行けないわけつて感じ! そうだ! 何かあいつの持ち物隠して、頼つてくるか試そつよ!~ そんで賭しよう!~」

「いいね~!~うち頼る方に百円!~」

「するい~!~うちも頼る方に千円!~」

「それじゃあ、頼らない方がいいじゃん~！」

アハハハハ……

「……。」

「ね~！美佳~。消しゴム貸してえ？」

「いいよ。はい。」

「サンキュー。」

クスクス…

「あのさ、修正テープ貸して？」

「はいよ。」

ククク…

クスクス…

み…か。

アナタガヤツティタノ？

アンナニ… やサシク… ローラカケテ…

ソンナコト…

シテタノネ… ?

## 1・5・理由

私は絶句したのち、一目散に店から飛び出した。後ろを振り向かず  
に…

ひどい…

ひどいひどい…

ひどいひどいひどい…

美佳はすつと友達だつて…そつ思つてたのに…！

私は、走った。走つて、走つて、美佳の家まで走つた。

ピンポーン…ピンポーン…

「は～い。」 ガチャガチャ

「…香菜子じやん。どうしたの？」

「ハアハアハア…。か…えして…。」

「え？ 何？」

「返してよー教科書もー消しゴムもー。」

「な…何言つてんの？ 香菜子自分で無くしたんでしょ？ 人のせいに  
しないでよね。」

「嘘つきーもう…全部知つてるんだからー。」

「え…。 何それ。トイレ行く振りしてずっと見てたわけ？ 感じわる  
…。」

「それは美佳じやん！ 他の人と悪口言つて…最悪だよー。」

「…香菜子だよ…。最悪なのは…。」

「はあ？ 何言つてんの？」

「香菜子がいつもあたしといたのに、この『ひみつ』離れていつ  
ちゃうからいけないんだ……！」

「何言つてんの？あたしが言いたいのはね……」

「だから、隠したの……。寂しかった……。それに気づいて欲しかった  
……。」

「美佳……だからって……。」

「悪いって思つてた……けど……。美佳に気持ち知つてほしかったんだ  
もん……。」

そう言つと、香菜子は泣き出した。

「美佳……ねえ……なんか『めんね』。美佳がそんな気持ちだなんて  
知らなかつたから……。言つてくれればよかつたのに……。」

「……言えなつ、かつた んだもん……。」「うん……とりあえず、教  
科書とか持つてきてよ……。」

「……わかつた……。」

香菜子は家に入つて行つた。

香菜子はどんな気持ちで最近私の事を見ていたんだろうか……？  
寂しいつて気持ちを押し込めて……私を見ていたんだろうか……？  
気づかれないように私の前では笑つていたんだろうか……？  
気づいて欲しくて隠して、隠して見つけてほしかつたのね……。

ガチャヤ

「これ……本当に『めん……。』

「うん……私……私も、香菜子に対しても少しの『ひみつ』をかつた……。  
だから、ごめんね。」

「うん……。」

そして、二人は少し笑つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9914c/>

---

忘れモノ屋

2010年10月15日02時17分発行